

地下水を鑿泉する苦心

大井戸を仕上るまで

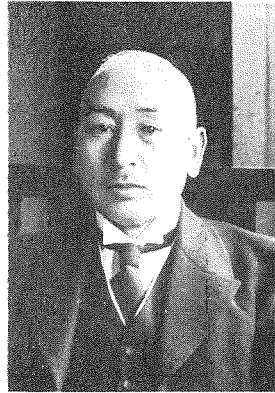
日本鑿泉會社長 水 野 豊

科學の進歩發達せし現今では井戸の種類や水質の如何や其效用等に就いて理解のない方は少いと思ひますが、自分會社が創立せられた明治四十五年の春頃にありましては大井戸の話をして、人が唯一人として信用して呉れる人はなかつた、そして其言分が面白いのです、いくら大井戸でも一晝夜に一萬石の二萬石の云ふ大量の水が出るものじゃない、まさか地下で手品もつかへまいと笑はれたものです。

私共が此會社を創めしたのは獨逸や米國で盛んに行はれて居る事績に研究を重ねて、之を我日本に應用して地中に埋没せられて居る寶を利用し、將來は都市水道を始めとして灌漑用水の缺乏より生ずる荒蕪地を開拓する上に於ても緊要の問題でありますから實に國家的の大事業である云ふ觀念の下に創めたのでありますが世人はなかなか信用して呉れません、それもその筈私共は地質學者でもなければ機械の技師でもない、全くの畑違ひの辯護士なんですから世人の信用してくれないのも當然の事である、止むを得ぬから此上は、試験的に大井戸を掘つて見本にするより外がないと考へて土地を買つて大鑿泉を完成したのが今の府下落合町にある有名な大井戸であります、斯くして研究に研究を重ねて一般的普及に努めて参りましたがまだまだ豫期の程度に進まぬのは遺憾として居る次第であります。

偕て私共が今大井戸の注文を受けたとして第一に苦心を要するのは果して所要の水量を得るか否やの判定である。之は容易ならぬ

提問題であると共に若し不結果に終るならば私共の損失を見るばかりでなく注文者にも多大の迷惑を掛けねばならぬ事である、然り而して之が判定は地質の鑑識が最大條件であります。偕て地質の鑑識が就いたとしても次に起るは技術上の問題である。何しろ五六十噸もある大器械を据え付け五十馬力位のボイラーを使用する以上は機械据付の基礎工事丈けでも大變です。此基礎工事が完全でない



Mr. Yutaka, Midsumo President of the Nippon Well Boring Company.
水野 豊氏

井戸の掘鑿が垂直に行かぬ事がある。そうなる後に數百尺の鐵管を挿入する場合に掘鑿した穴に屈曲があつては挿入が出来ぬ事になる、こうした點に最も細心の注意を要するのである。愈大井戸が出来上つたとして其井戸の滾濺をせねばならぬし、其工事中崩壞の虞れや錐が取れなくなる場合がないでもないそう云ふ失敗がある、百日の説法屁一つとなつて更に掘り直さなければならなくなつて大損失を蒙らねばならぬ。而して井戸の

滾濺も無事に濟んだと思ふと今度は水量の問題が心配になつて来る、果して注文者需要の水量を得るか何うか。愈水量試験も無事に濟んで井戸引渡完了迄は迎も容易ならぬ苦心が其處に深く藏められるのである。以上申上た事は唯一通りの順序を述べたに過ぎないが、其内部的監督其他の注意については筆紙は盡し難い點が多いのである。愈引渡後完了と云ふ電報を手にする迄は、夜もおちおち眠れぬ位心配を重ねる。何の仕事にしても出来上つて見れば容易な様に見えるがそれを完成する迄に費やす幾多の苦心は蓋し想像以上でせう